

使徒の働き9章19－31節 「迫害者から宣教者へ」

1A 福音宣教の始まり 19－22

2A 殺害の陰謀 23－25

3A エルサレムでの仲間入り 26－29

4A タルソへの渡航 30－31

本文

使徒の働き 9 章を開いてください。私たちの学びは、サウロ、すなわちパウロが、復活のイエスに会い、回心したところまで読みました。今晚は、その続き、宣教者へと変わったサウロの姿を見ていきます。19 節の後半からです。

1A 福音宣教の始まり 19－22

^{19b} サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいて、²⁰ ただちに諸会堂で、「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた。

アナニアを始め、サウロはダマスコにいる弟子たちと数日間、時間を過ごしました。

それから直ちに福音を語り始めます。これは、普通の人ではできないでしょう。サウロにとって、イエスこそがメシアであり、神の子であるということは、パズルの最後の一片が埋められたようなものです。主は何度となく、ご自分が律法と預言者の成就であることを語られました。「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思ってはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」そこで、肝心の律法や預言者について、どれほど知っているかと言っても、ユダヤ人だからといって分かっているわけではありません。しかし、サウロはとことんまで学んできた者です。

イエスが神の子であるというのは、ご自身が大祭司カヤパの前で告白されたとおりであり、それによって死刑宣告が下されました。預言には、何度となく、キリストが神の子であるということ、つまり神ご自身であることを教えています。「詩篇 2:7 主は私に言われた、『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。』」「イザ 9:6 ひとりのみどりごが私たちのために生まれる。ひとりの男の子が私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」

²¹ これを聞いた人々はみな驚いて言った。「この人はエルサレムで、この名を呼ぶ人たちを滅ぼした者ではないか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためでは

なかったか。」

サウロの回心と変貌について、だれもが驚いています。主ご自身が恵みによって、彼を選びの器にしたということは、すべての人を驚かせています。まずは、弟子アナニアでした。まさに、ダマスコにいる、この道の者たちを捕縛するためにやってきていたのですから、身の危険を感じていたはずです。そして、次にここ、会堂にいる人々です。彼らも、祭司長から、弟子たちを捕縛する権限をサウロが与えられていたのを知っていました。そして、後に出てくる、エルサレムの弟子たちも、初めサウロを非常に警戒していました。

カルバリーチャペルの牧師で、ラウル・リースという人がいます。彼は、若い時から怒りの問題を持っていました。それで高校で問題を引き起こしていました。大人になってから、問題を起こした裁判所に連れていかれました。そして、ベトナム戦争に行くなら免除するという判決で、ベトナム戦争に参戦です。そこで殺人鬼となってしまいました。それで、上官が危険と判断して、本国に帰らせました。

彼は結婚しましたが、この制御できない怒りの問題は変わりませんでした。彼は、家で、自分の妻と娘を殺そうと思って待っていました。待っているうちに、テレビをつけたら、チャック・スミスが出てきました。そこで、イエス・キリストの福音に触れて、悔い改めの祈りを献げました。けれども、恐れに満ちていた妻は、全く信じません。それが本物の回心であることは相当の時間がかかったそうです。また彼は、元いた高校に戻り、伝道をし、聖書の学びをしようと思いましたが、警察が来ました。彼が、また問題をやらかしくしたのではないかと思ったからです。彼は言いました、「私は昔のラウルではない、新しく生まれたのだ。古いラウルは過ぎ去った。」

神の恵みは、このように周りの人々を驚かせます。時にはその恵みに強く反対する人々もいるのです。レギオンを追い出された男性について、解放されたのに、イエスにここから出て行ってくれと地域の人々はいいました。ピリポにおいては、占いの霊から女が解放されたけれども、それでパウロとシラスはむち打ちを受けました。人々が罪と悪霊の縄目から解き放たれることは、みなが喜ぶと思うかもしれませんが、いや、古い生活のことを願っている人々が周りにいて、反対します。

²²しかし、サウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。

ステパノが、知恵をもって議論したのでユダヤ人たちが対抗することができませんでしたが、サウロも同じように、ますます力を増して、イエスが彼らのメシアであることを証明していきました。

けれども、ステパノの時と同じように、相手は反論ができなくなっているから、あとは力づくで抑え

つけるしかなくなります。サウロには、これから殺そうと企てる者たちが出てきます。それは、サウロの証明に反論ができないからです。自分たちは、悔い改め、イエスを信じ受け入れて、この方を主とするしかないのです。その悔い改めを拒んでいるので、殺そうと企めます。

2A 殺害の陰謀 23-25

²³ かなりの日数がたち、ユダヤ人たちはサウロを殺す相談をしたが、²⁴ 彼らの陰謀はサウロの知るところとなった。彼らはサウロを殺そうと、昼も夜も町の門を見張っていた。²⁵ そこで、彼の弟子たちは夜の間に彼を連れ出し、籠に乗せて町の城壁伝いにつり降ろした。

ここ 23 節で、「かなりの日数がたち」とルカは記していますが、パウロ自身がガラテヤ人への手紙で自分の辿った経緯を、順序立てて話している部分があります。「1:15-17 しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき、私は血肉に相談することをせず、私より先に使徒となった人たちに会うためにエルサレムに上ることもせず、すぐにアラビアに出て行き、再びダマスコに戻りました。」彼は、そのままアラビアに出て行ったことが分かります。そしてダマスコに戻ってきて、その時の話がここ 23 節です。

当時のアラビアは、今のアラビア半島だけでなく、ヨルダン南部も含み、特にナバテア王国というのが栄えていました。パウロが、コリント第二 11 章で、ダマスコで、アレタ王の代官がパウロを捕らえようと狙っていることを話しています。「11:32-33 ダマスコでアレタ王の代官が、私を捕らえようとしてダマスコの人たちの町を見張りましたが、33 私は窓からかごで城壁伝いにつり降ろされ、彼の手を逃れたのでした。」このアレタ王とは、ナバテア王国の最も栄えた王、アレタス四世です。彼の娘は、ヘロデ・アンティパスの妻であり、ヘロデはヘロデアと結婚するために彼女と別れました。ユダヤ人たちが見張っていただけでなく、アレタ王の代官にも狙われていました。

アラビアで何をしていたのでしょうか？アレタ王の代官に追われるぐらいですから、そこでも伝道していたのかもしれませんが。しかし、パウロが本格的に福音宣教に関わるのは、あと十年ぐらいしてからです。アンティオキアに教会が建てられ、バルナバがパウロを呼ぶ時まで、ルカは彼が何をしていたのか多くを書き記していません。パウロは力強くイエスがメシアであることを論証していましたが、神の時がありました。備えがありました。多くの神に用いられる人々は、用いられる前に長い期間の備えがあります。

3A エルサレムでの仲間入り 26-29

²⁶ エルサレムに着いて、サウロは弟子たちの仲間に入ろうと試みたが、みな、彼が弟子であるとは信じず、彼を恐れていた。

アナニアだけでなく、エルサレムにいる弟子たちも恐れています。弟子であることを装って、内部に浸透し、それで一気に捕縛するという工作を行ってもおかしくありません。相当、警戒しています。ガラテヤ書では、パウロはペテロのところに 15 日間、滞在していたとありますが、ペテロをしても、弟子たちの疑心暗鬼を取り除くことができないでいたのです。そこで登場するのが、バルナバです。

²⁷ しかし、バルナバはサウロを引き受けて、使徒たちのところに連れて行き、彼がダマスコへ行く途中で主を見た様子や、主が彼に語られたこと、また彼がダマスコでイエスの名によって大胆に語った様子を彼らに説明した。²⁸ サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の御名によって大胆に語った。

バルナバの名前はヨセフですが、人々が「慰めの子」と彼を呼ぶようになり、それがバルナバです。彼は、人々に慰めを与える人でした。サウロと、エルサレムにいる弟子たちとの架け橋になり、後にアンティオキアにある教会では、その教会にサウロを招き入れた人でありました。平和を造る人は幸いです。架け橋は、とても骨の折れる作業です。けれども、バルナバには、賜物がありました。平和の実を結ぶところの、知恵の賜物です。

私は個人的に、このような賜物が与えられている兄弟姉妹が、とても貴いと思います。教会は、しばしば互いによくわかっておらず、それで不必要に警戒したり、分かれてしまうことがあります。しかし、二者の間を取り持つ人々がいれば、そこに知恵の言葉が与えられ、平和が支配します。

4A タルソへの渡航 30-31

²⁹ また、ギリシア語を使うユダヤ人たちと語ったり、論じたりしていたが、彼らはサウロを殺そうと狙っていた。³⁰ それを知った兄弟たちは、彼をカイサリアに連れて下り、タルソへ送り出した。

ステパノの時と同じですが、ギリシア語を使うユダヤ人、ヘレニズムのユダヤ人に福音を語り、論じていました。ダマスコでそうであったように、サウロを殺そうとする人々が起こったのです。彼は後に、エルサレムに戻ってきた時に、ユダヤ人たちにこのように弁明しています。「22:17-21 それから私がエルサレムに帰り、宮で祈っていたとき、私は夢心地になりました。18 そして主を見たのです。主は私にこう語られました。『早く、急いでエルサレムを離れなさい。わたしについてあなたがする証しを、人々は受け入れないから。』19 そこで私は答えました。『主よ。この私が会堂ごとに、あなたを信じる者たちを牢に入れたり、むちで打ったりしていたのを、彼らは知っています。20 また、あなたの証人ステパノの血が流されたとき、私自身もその場において、それに賛成し、彼を殺した者たちの上着の番をしていたのです。』21 すると主は私に、『行きなさい。わたしはあなたを遠く異邦人に遣わす』と言われました。」

それで兄弟たちが、彼を大きな港のあるカイサリアまで連れて行き、それでタルソ行きの船に乗

せました。こうして彼は 7 年ぐらい、故郷のタルソにすることになります。そこで何をしていたのか、ルカも、彼自身も記していません。けれども、それがかえって、神の備えを教えてください。主は、今、起こっていることを将来のご計画のための備えとしておられます。

³¹ こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地にわたり築き上げられて平安を得た。主を恐れ、聖霊に励まされて前進し続け、信者の数が増えていった。

ここで、さらなる教会の前進が書かれています。ステパノの殉教を契機に起こった教会への迫害ですが、その急先鋒のサウロを主が捕らえて下さり、彼自身もタルソに移ったため、教会全体に平安が築き上げられました。教会は、こういった平安の時、また迫害の時と、それぞれの時があります。ここに、ユダヤとサマリア以外に、主の宣教の地、ガリラヤにも教会が興されていることが書かれていますね。広がりを見せています。

平安な中で、主を恐れていきました。霊的復興には必ず、主への恐れが先立ちます。この方を真剣に受け入れるのです。そして、次に聖霊による励ましです。私たちは絶えず励ましが必要ですが、それを行われるのが聖霊です。そして、信者の数が増えていきます。増えるのはあくまでも結実であり、それが目的ではありません。

パウロはしばらく出てきませんが、熱心に福音を宣べ伝えることのできた彼でさえ、宣教者として遣わされるのは、何人も経ってからでした。思えば、聖書の中で、そうした準備期間のない人はいないのではないのでしょうか。ヨセフは、長年、エジプトで奴隷の身でありました。アブラハムも、初めはいろいろな失敗をして、それで最後にイサクを献げるという命令に従いました。モーセは、初めの 40 年はエジプト、次の 40 年は荒野で羊飼ひ、そして 80 歳になってからようやく、エジプトで解放者の務めを果たしました。そして、ダビデは主が共におられましたが、義父のサウルに追われる身であり、彼がイスラエルの王となるのは、はるか後です。

モルデカイが、エステルに言った言葉が、大事ですね。「4:14 **あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、このような時のためかもしれない。**」

現代においても、チャック・スミスが、その牧会生活は、17 年間、カルバリーチャペルではなく、違う教団で奉仕をしていました。その長年の積み重ねがあり、それで、聖霊が降り注いだ時に、その大多数のヒッピーたちの回心に、対応することができたのです。だれひとりとして、備えの無かった人はいないのです。主は、私たちを神の作品として召されました。主が、私たちを陶器として、その粘土を、陶器師として練っていただくのです。